【論　文】

色と延長

齋藤 暢人

0. はじめに

物体には色がついていて、同時に大きさがある。これは、改めて記述してみるとかえって奇妙に感じるくらいに自明な事実である。だが、この平凡な事実が、かつて幾人もの偉大な哲学者を魅了し、これをめぐってさまざまな思索が展開されたという事態ほどには奇妙ではあるまい。結果として、この事実をめぐる考察は形而上学の進歩に少なからず貢献したのであり、今日においてもなお意識と存在の関係を論じるための最良の出発点のひとつなのである。色と延長という全く異なる与件が、しかし緊密に一体となって与えられるというこの事実から、われわれはいったい何を知りうるであろうか。本稿では、フッサール、ブレンターノ、パースの三人の偉大な哲学者によるこの事実についての考察を比較し、感性的世界の秩序とはなにかという問題を考えてみたい。

議論は次のように進む。はじめに、延長論の基礎となるフッサール『論理学研究』第三研究におけるメレオロジーの要点を指摘する（1)。次いで、フッサールの議論の背景を明らかにすべく、その起源と目されるブレンターノの思想を、その独自のメレオロジーに注目して検討する（2)。そのうえで、両者の考察が明らかにした、フッサール的、ブレンターノ的メレオロジーの基本概念について、現代の視点を加味しつつ検討する（3)。かくして、色と延長の関係をめぐる問題の本質が明らかになるにつれて、ブレンターノあるいは現象学派の哲学とパースの思想との内的連関が明らかとなる

本学現代教養学部教授

(4)。最後に、これらの諸理論を比較検討することで得られたものはなにか、今後の課題とはなにかを論じて、考察の締めくくりとする。

1．色と延長：フッサール

色と延長の関係についての言説でよく知られているのは、フッサールの『論理学研究』第三研究第 11 節におけるものであろう[i]。すなわち、色は、色をもつものがなくては存在しない。あるいは、色は、それが覆う延長がなくては存在しない。フッサールのこうした主張は、カントのア・プリオリな綜合判断に相当する、いわゆる事実的（質料的）ア・プリオリの例としてなされたものであるが、反響は大きく、この科学の時代においてあからさまになされた形而上学的主張という、論理実証主義者の批判を招くことになった。

しかし、たしかに物議を醸したものの、このテーマは抗しがたい魅力をまとっている。現象学者の主張には科学的な根拠などあるはずもないが、われわれの知覚世界は、この色と延長の相即的関係についての直観なしにはたしかになりたちえないように思われる。この直観は知覚の本質に属しており、現象を支える本質的構造の一端がここに表れているのではないであろうか。色と延長の関係について思案を巡らし始めるとき、われわれは現象一般の普遍的な構造とは何かという問題へと自然に導かれてゆくのである。フッサールは、実際にそのような確信を抱きつつ、分析の手段としての新しい言語を構築していったようにみえる。全体と部分の関係を記述するメレオロジーと、それに密に関連する基づけ関係の理論がその具体的な成果だったという推測は、それほど的外れではないであろう。

第三研究における基づけとメレオロジーにはさまざまな事例の記述、分析が含まれており、その内容の豊かさは大きな魅力のひとつである。しかし、ここではとくに色と延長の関係に考察範囲を限定しよう。そうすることが許されるのはこの主題の重要性によるのであるが、それは本稿の結論においてはじめて明らかになる。しかしさしあたりここでは、これが基づけ関係の典

型であり、いわばパラダイムをなしているということを主たる理由として挙げておこう。

さて、フッサールの思想の概要を把握するために、第三研究第１節における、部分関係の分類をみておこう。ここでは研究の方向性が予告されている。フッサールによれば、部分は、以下のように二重に分節される。

- 非離接的部分
- 離接的部分
  - 非独立的部分
  - 独立的部分

【図 1.1　部分の分類】

非離接的部分は分離できない部分である。例としては、色と特定の赤の関係が挙げられる。色は、その種である赤に対する類であり、それゆえ両者を切り離すことはできない。しかし、そうではあっても一方と他方のあいだには順序関係があり、これは部分関係とみなされうるのである。

それに対して、分離できる部分は離接的部分と呼ばれるが、これらはさらに、連繋されている、あるいは滲透している／連繋されていないという観点から二分される。

前者の例は赤と延長である。これらは離接的であるという意味においては分離できるが、連繋されているという意味においては分離できない。このように分離可能性と不可能性が同時に成立しているということは奇妙に感じられるかもしれないが、もちろん矛盾を意味しない。それらは異なる関係である。これらは連繋されているので非独立的であるが、しかし離接的であることから部分をなしている。それゆえ、これらは非独立的部分であるとも言われる。

後者の例は「細分化されうる全体の部分」であるが、より分かりやすく言えば延長のいくつかの区間であろう。これらは先の非独立的部分と異なり、二重の意味で分離可能であって、それゆえ独立的部分であるとも言われる。

以上の分類はそれほど複雑なものではないのであるが、のちにこれらの関

係をより一般的な観点からとらえなおすことになるので、そのための準備として、ここでもう一度整理しておこう。上で登場した諸項はいずれも部分であるが、それらのあいだに成立する関係が異なっており、この差異は、離接性の有無、および独立性の有無によって特徴づけられる。したがって、これらの関係を以下のようにまとめることができるであろう。

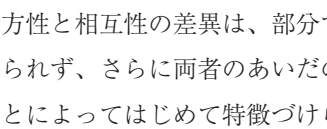
【表 1.1　フッサールによる部分の分類】

	延長と延長	赤と延長	色と赤
離接的	○	○	×
独立的	○	×	×

こうした部分概念への関心が具体的にはどこから生まれたのかということは、同研究第 4 節におけるシュトゥンプフの研究への言及から知られる。シュトゥンプフは、心理学的な立場から、色と延長が相即的な関係にあることに注意を促している。フッサールは音の強度と音質のあいだにも同様の関係がみられることを指摘しつつ、ここに登場する非独立性が、エーレンフェルスが形態質、フッサール自身が図的契機、マイノンクが基づけられた内容と呼んだものに共通する特徴であるとしている。要するに、この問題はフッサールがひとり孤独に解決を目指してとりくんだものではなく、当時のブレンターノ学派のなかで共同討議されたものだったのではないか、ということが推測されるのである。そのような討議の過程で、意識における部分構造の研究は、次第に心理学研究から哲学的な研究へと一般化されていったのではあるまいか。

このような部分の多義性については、同研究第 15、16 節以降でさらに詳しい検討がなされる。なかでも色と延長の関係については、第 15 節において、延長と色の関係が、延長同士の関係とは異なることが改めて確認され、引き続く第 16 節で、両者の関係が基づけによって整理される。部分のあいだには次のような多様な関係がありうるのであり、この多様性をもたらすの

が基づけなのである。



【図 1.2　基づけ関係の分類】

ここで相互的基づけの例として挙げられるのが色と延長の関係であり、これらは相互に滲透しあっている、とされる。それに対して、一方的基づけの例として挙げられるのは、判断と表象の関係である。判断は表象なしにはありえないが、表象は判断でなくともよいので、判断は表象に一方的に基づけられているのである。

さて、こうした一連の議論の中で、フッサールはブレンターノに言及するのである。自らの基づけの諸類型は、ブレンターノの可分性の諸類型に対応している、という。ブレンターノは、対象を分割するとき、そこには一般に可分性があるのだが、さらに一方的可分性と相互的可分性の区別が可能であることを指摘した。

ここで、分割が一方的なものでありうるばかりでなく、相互的なものでもありうるということは、この分割という概念的操作が、たとえば物体を破砕するという物理的作用とは単純に同一視できないことを示している。この一方性と相互性の差異は、部分であるという外延的な性格によっては特徴づけられず、さらに両者のあいだの依存関係という、内包的な性格を考慮することによってはじめて特徴づけられるのである。フッサールは、ブレンターノが分割のなかに検知したこうした様相的な差異を、基づけの概念を与えることでより明確に示したといえよう。

フッサールの以降の議論は基づけ関係のさらなる応用へと向かう。たとえば、直接的基づけと間接的基づけの区別がなされる。それによれば、色は赤、青に基づけられている、明るさは色と異なる、赤、青は延長を必要とする、などがなりたつばかりでなく、さらに、色、明るさは青、赤などを介し

て延長と関係する、といった、これらの諸関係からなる複合的な構造が指摘されるのである。知覚世界がいかなる構造をもっているのかは、その諸要素がお互いにどのような関係にあるのか、それらの関係がいかなる構造を形作っているのかを分析・記述することにより、少しずつ解き明かされうる。だが、これらの例は、のちにみるように、いずれもブレンターノが好んで取り上げるものでもあるのだ。

以上から、意識現象を全体と部分の関係に従って分析するという発想は、フッサールの完全なオリジナルではなく、ブレンターノの思想にその起源をもち、おそらく当時のブレンターノ学派のなかで共有されていたものであるということは、少なくともありそうなことである。問題は、第三研究のなかでフッサールが典拠を明示していないので、それがブレンターノの思想のいかなる部分なのか、詳細が不明だという点である[ii]。

しかし、近年進展しているブレンターノ研究の成果を検討すると、そこからフッサールの現象記述の方法論の背景について、いくらかの確度をもった推測が可能となるように思われる。それは哲学者のあいだの単なる影響関係の解明という、思想史的な意義しかもたないような事柄ではなく、ここで論じられている形而上学的問題についていっそうの理解を深めるための絶好の機会である。

2. 色と延長：ブレンターノ

前節で検討したように、フッサールの議論が下敷きにしているのがブレンターノの哲学であることはほぼ明らかであるが、とくにその推測が強まるのは、ブレンターノの『記述心理学』を検討するときであろう。同書では、意識内容の分析が、その部分への分析として繰り返し試みられている。また、分析と記述の結果は、心理現象に関する事柄とのみされたわけではなく、その存在論的含意が摘出される。つまり、ここで展開されているのは、意識現象を手がかりとした存在論としての全体部分論、メレオロジーである[iii]。

ブレンターノのメレオロジーは、しかしながら、彼のライフワークの一部

とすら言えるテーマであり、その研究キャリアの初期から後期に至るまで、理論の修正と拡張が反復され、全体として非常に複雑な変遷と内容をもっている。本稿で扱う問題について考察するためには、そうした思想の細部にまで立ち入る必要はない。そこで、先行研究の助けを借りつつ、彼の思想の文脈の概要を把握したうえで、それに基づいて考察を進めてゆこう。

研究者によれば、ブレンターノの思想には三つの発展段階が認められる[iv]。

【表 2.1　ブレンターノ哲学の発展】

	時期	特徴	主要文献・資料
1	初期 1862-1874	概念論	ヴュルツブルグ形而上学講義 草稿 M96
2	中期 1874-1904	志向性の理論	『記述心理学』[v]
3	後期 1904-1917	物主義 reism	『範疇論』[vi]

この整理にもとづき、各時期におけるブレンターノのメレオロジーの概要を確認してゆこう。

2．1．初期のメレオロジー

ブレンターノがアリストテレス研究から出発したのはよく知られているが、このことはメレオロジー研究にも決定的に影響した。ごく早いうちから、存在を部分関係によって分析することを試みている。部分概念が拡張され、多様な関係が用意される。これらによって実在の内的構造や実在同士の外的な関係が一般的な見地から分析されるのである[vii]。論者によっては、ここにフッサールの「形式的存在論」の萌芽を見出す[viii]。具体的には、以下のように、多様な部分が区別される[ix]。

8

1. 物的部分
2. 形而上学的部分
3. 論理的部分

物的部分は、フッサールが断片と呼ぶものに相当するであろう。

形而上学的部分は、アリストテレスの実体と属性の関係を部分という観点からとらえ直したものである。実体は独立的であるが、属性は非独立的である。そして、属性は本質と付帯性に分析できる。これらの本質的性質や付帯的性質は、それぞれが部分として全体である実体に含まれる。つまり、属性は実体の部分になっている。

論理的部分とは、種に対して類をその部分とみなす、というものである。赤は色であるから、色は必ず赤に含まれる。このような関係が成り立つ場合、含まれるものを部分とみなすのである。ここでは、順序構造に基づくアナロジーが行われているように思われる。この論理的部分はフッサールの非離接的部分の概念に相当するであろう。

以上のような部分関係の分類は、全体がそのまま維持されるわけではないが、のちのちまで残存する基本的な特徴はすでにいくつか現れている。

フッサールの断片にあたる、常識的な意味での部分関係は、哲学的に重要な他の部分関係から注意深く区別される。

また、論理的部分の概念はブレンターノの哲学に特徴的なものであり、通常は類種関係とされて、部分関係とはみなされない。それをブレンターノは敢えて部分関係とみるのである。このように考えることは存在論的には非常に重要な帰結をもつであろう。つまり、普遍者としての類が個体から遊離することが禁じられ、唯名論が帰結する。

2．2．中期のメレオロジー

中期においては『経験的立場からの心理学』の公刊によりいわゆる志向性の理論が確立されるが、メレオロジーに関しても興味深い進展がある。『記

述心理学』第二章においては次のような部分の分類がなされている[x]。

1. 可分的部分
2. 区別的部分
3. 論理的部分
4. 変容された区別的部分

これらの部分は、1と2以下の二種類に大別することもできる[xi]。2以下はいずれも区別的部分とみなされうるからである。

1の可分的部分は、実際に分割できる部分というほどの意味で、通常の物体の部分にほぼ相当する。形而上学的にはそれほど重要ではない。

2の区別的部分は、現実には存在しない部分である。ブレンターノは次のような例を挙げている。哲学的な意味での原子、つまり不可分なものとしての原子は、定義上部分をもたない。しかし、このようなものについても、その部分を概念において想定することはできる。

3の論理的部分については、意味の上では大きな変更はないが、意識作用のなかからその事例が採られている。肯定は、肯定的に判断することの論理的部分であり、また、経験は見ることの論理的部分であり、さらに、見ることは赤を見ることの論理的部分である。つまり、より限定された個別的な意識作用は全体であって、いわば個体である。それらの抽象的な規定は、そのような個体としての作用の論理的部分とみなされるのである。

4の変容された区別的部分は、意識作用とその対象のあいだの差異などもまた全体と部分の関係によって理解しようとするものである。これらは志向性の理論との関係で興味深いものであるが、ここでは立ち入らないこととする。

2．3．後期のメレオロジー

後期のブレンターノは唯名論的な傾向を強め、存在するものを具体的なも

のに限定するという物主義 reism の立場を採った。この変化に応じて、メレオロジーにも変化がみられる[xii]。

『範疇論』においては次のようなメレオロジーがみられる[xiii]。実体は属性の部分である。両者の関係は、一方的な可分性である。実体は属性から可分的であるが、逆は成り立たない。

以上の三段階のメレオロジーのなかで、内容的にも時期的にも、フッサールの議論に近いのは中期の理論であり、とくにその区別的部分に関する分析である。区別的部分を論じるなかで、ブレンターノは、色と延長の相即性を指摘しているのである。

これらは区別的部分であるから虚構的であり、それぞれが別個に存在するものであるとは言えない。しかし、その記述は詳細で、両者の関係について考えるうえでは重要な手掛かりとなりうる。

ブレンターノは、次のような、着色された小領域を例に挙げる。

二つの青い点
黄色い点
灰色の点

これらのあいだにはどのような差異が見いだされるであろうか。

まず、二つの青い点の違いは、空間的な位置の違いである。それに対して、青い点と黄色い点の違いは、質の違いである。さらに、黄色い点にはみられない、灰色の点における濃淡の違いは、明るさの違いである。

これらの差異から、着色された小領域は、質、延長、明るさといった諸部分をもち、これらが相互に滲透していることがわかるのである。

これらの部分は、可分的部分のように実際に存在する部分ではなく、虚構的に存在するとされる部分である。というのも、これらは相互に緊密に結びついて一体となっているからである。このことを、これらは相互に貫入的部分である、ともいう。

また、色や延長はそれ自体が変化するものではなく、普遍的なものであると考えられるかもしれない。しかし、ブレンターノによればそうではない。これらは個体的なものである。色や延長は個体的で、限定されている。それらの変化は着色された小領域を変化させてしまうのである。

ここで摘出された色、延長、明るさなどは、それぞれ部分ではあっても、可分的な部分とは根本的に異なる。それゆえ、それらのあいだには可分的な関係は成り立っていない。したがって、フッサールの立場からみると、ここには相互的基づけの関係がなりたっていることになる。

ただし、後期においては、空間がより独立的なものとも考えられるようになってきた。一定に保たれた空間において色は変化しうる。他方で、空間が変化したときには色もまた変化する。ここから言えるのは、色は空間に依存するが、空間は色に依存しない、ということである。これは空間の実体化を意味する[xiv]。

フッサールは色と延長の関係を相互に基づけあう関係とみたが、これは、ブレンターノがこれらのあいだに相互に滲透する不可分な関係をみたことと軌を一にしている。ここには、ブレンターノ学派の共通見解が認められるかもしれない。しかし、上記のような空間の実体化が進んだのであれば、その後、ブレンターノにおいて、延長は色を受け容れるものとみなされていったことになる。では、現象学の立場においても、そのような理論の再検討の余地は本当にないのだろうか。色と延長は、本当に対等の立場で基づけあっているのか。それとも、空間は質を受容する場として機能しうるのであろうか。

そのような可能性の検討は、現実のフッサール現象学においてはなされなかったかもしれない。そうである以上、ここで考察を打ち切ることも不可能ではないであろう。しかし、フッサール現象学の枠を超えることを許せば、考察をさらに続行することは可能であるように思われる。

3. 可分性と基づけの論理

ここで、これまでの議論を整理するためにも、基づけ概念の論理的な性質についていくつか注意しておく。

3. 1. 基づけと可分性

先に、第三研究第16節におけるフッサールの基づけによる分析に言及したが、そこでは、あまり目立たないやりかたでではあるが、ある重要なことが指摘されている。ブレンターノの言う相互的に可分的であるとは、相互に基づけ関係がないことだ、というのである。つまり、フッサールは、自身の基づけを、ブレンターノの可分性の矛盾概念と理解している。

そもそも基づけ関係とはどのようなものとして理解すべきであろうか。それは次のように、存在と様相によって理解されることが多い[xv]。つまり、xがyに基づけられているとは、xの存在がyの存在を必然的に含意する、ということだとされるのである。

$$\Box(Ex \rightarrow Ey)$$

このような定式化の問題点はすでに現代形而上学のさまざまな局面で指摘されているが、関連する論争を解決するのは事実上不可能であるから、ここでは立ち入らないこととする[xvi]。だが、この定式化は、明らかに次と論理的に同値であろう。

$$\neg\Diamond(Ex \wedge \neg Ey)$$

ところで、他方において、xはyから可分的であることはどのように理解すべきであろうか。直観的には、次のように考えることが少なくとも可能なのではないか。つまり、可分的であるとは、たとえyがなくともxはありう

るということである、と。すると、基づけの場合と同様に、これを存在と様相で表現するならば、次のようになるであろう。

$\Diamond(Ex \wedge \neg Ey)$

このように論理構造を明示すると、基づけはたしかに可分性の否定、外的否定となるのである。

この考察から次のことが推測される。基づけが存在の必然的含意とみなされたことは、そもそも基づけが可分性の否定であったことに由来するのではないか。つまり、基づけ関係の論理的定式化は、ブレンターノにおける存在の分析にその起源をもつのではないか。

3．2．基づけと必然的存在

様相論理においてはよく知られたことであるが、厳密含意$\Box(p \rightarrow q)$を用いて必然性を表現することができる。それは次のようにするのである。

$\Box p \leftrightarrow \Box(\neg p \rightarrow p)$

ここから次のような文が得られることは直ちに明らかであろう。

$\Box Ex \leftrightarrow \Box(\neg Ex \rightarrow Ex)$

さらに、x が存在しないということ、¬Ex を、x の不在 nx が存在するということ、Enx だと言いかえると、次のようになる。

$\Box Ex \leftrightarrow \Box(Enx \rightarrow Ex)$

右辺は基づけの構文である。つまり、x の不在が x に基づけられている、と

いうことを意味する。したがって、必然的存在とは、その不在がそれ自身に基づけられていることである、と言い換えられる。

3．3．基づけと可分性の関連概念

上述のことから、基づけが様相概念と関連することは明らかであろう。これまでの話を手がかりとして、様相と基づけのさらなる関連を明らかにしよう。

ブレンターノは可分性を原始概念とし、それによって現象を分析したが、フッサールは基づけ概念によっても同様のことができることを示した。彼は、第三研究第16節で、可分性と基づけの違いを、定義に関しては一致しないが、外延は一致する分析である、としている。

フッサールの論述から明らかなように、基づけ関係は順序になっているが、他方で部分関係もまた順序である。したがって、存在の基本構造を可能な限り部分関係によって記述しようという意図があったならば、フッサールの仕事はブレンターノの仕事の重要な補完であると言えよう。

しかし、このような代替概念の可能性が明らかになったということは次のことも意味する。つまり、可分性に代わりうる他の概念が直ちに見つかるのである。

まず、ひとつは$\Box(Ex \rightarrow Ey)$の双対であって、それは次である。

$$\Diamond(Ex \wedge Ey)$$

すなわち、xとyは共に存在しうるということであり、いわば共存可能性である。

もうひとつはその否定であり、次である。

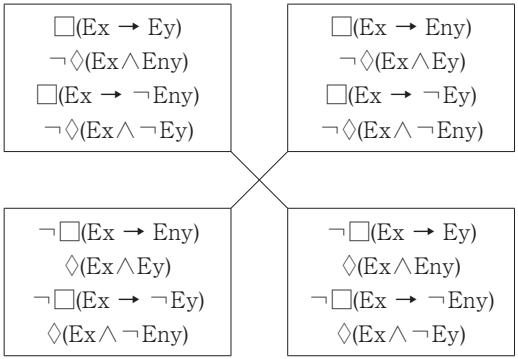
$$\neg\Diamond(Ex \wedge Ey)$$

あるいは、論理的には同値であるが、基づけの内的否定であり、次である。

$\Box(Ex \rightarrow \neg Ey)$

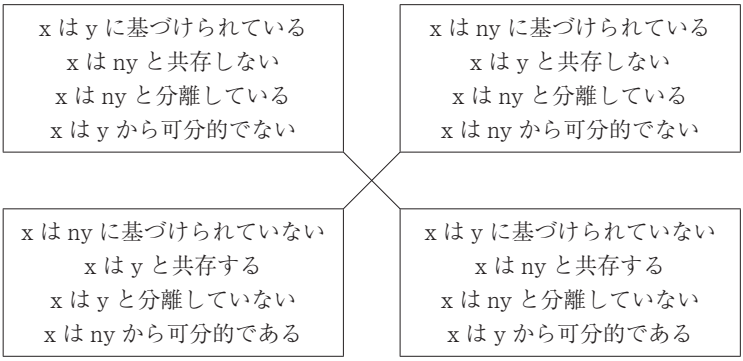
すなわち、x と y は共には存在しえないということであり、いわば共存不可能性、あるいは必然分離性（必分性？）である。

第三研究第 10 節におけるフッサールの主張は、こうした事情を示唆していると思われる。すなわち、部分の連繋の必然性ではなく、不可能性について述べるときでも、基本的な概念は非独立性である、という。つまり、存在と様相のあいだの異なる組み合わせは、外的否定、内的否定、双対性といった論理的操作を介して相互に移行することが可能なのである。このことは以下の図のような、対当によく似た構造に整理できる書き換えの可能性から直ちに明らかである。枠内の文は同値であり、対角線を挟んで向かい合う文は矛盾関係にある。



【図 3.1　基づけと関連概念の関係】

これらはそれぞれ、基づけ、可分性、共存性、必然分離性によって解釈されるのであるが、それぞれの文は、いずれもそれ以外のすべての概念によって記述されうる。



【図 3.2　諸関係の意味】

したがって、論理的には、共存可能や必然分離を原始概念に選んでも、ブレンターノが記述したような事態は正確に記述できるのである。

しかし、これらは論理的な特性上、順序概念にならないので、直観的には部分関係とは言えないであろう。既述のように、ブレンターノ学派においては、順序構造が部分であることのメルクマールとなっていると推測される。

しかしながら、ここでは直観的な意味づけから出発しつつ、論理的な可能性の探究へと乗り出すべきであるように思われる。われわれの知的探求能力によれば、現象における諸要素の共存のなかに否定が介在することで順序が生じることがありうるということが示されているからである。このような事情の精確な機構は、もちろん論理的観点からの分析によらなければならないのであるが、われわれの意識において、平衡状態にある共存の秩序が否定の介入によって破れることにより部分の構造が浮かび上がってくるということもありうるのではないであろうか。

3．4．注意：可分性と基づけのあいだ

基づけの分析で最も成功しているのは、現状ではファインによるものである。それによれば、基づけ関係は、位相（閉包）を用いて次のように表すことができる。

$xWFy \leftrightarrow y<cx$

この分析は多くの利点をもっており、数学的にも興味深い。しかしながら、ここで右辺に現れた文は、□(Ex → Ey) と近い論理構造をもつものの、主語の順序が入れ替わっており、異なるものとせざるを得ない。したがって、現状では、ここで示した基づけ概念の分析と、従来のファインの分析とがどのように関係するのかは不明である。

4. 色と延長：パース

ここで大きく話題を転じる。意識への否定の介入というような事情は、フッサール現象学のなかにもみられなくはないが、論理学者の眼でそれを鋭く描き出したのはおそらくパースであろう。彼の哲学のなかにも現象学があり、そこでは独特のカテゴリ論が前提されているものの、意識を満たす質のなかに否定性の契機が貫入してくることによってひきおこされる存在の揺らぎについて、興味深い記述が多く残されている。

そこで、彼の最初期の論考にして現代形而上学の傑作である論文「新しいカテゴリ表について」を参照してみる[xvii]。パースが目指したのは、異論の余地のあるカントのカテゴリの導出に代わる、より完全なカテゴリの導出である[xviii]。その議論は内容豊富で、その全容をここで論じることはできないが、その必要もまたない。しかしそこには、色と空間の関係についての注目すべき分析が含まれており、われわれの目下の研究テーマには直接的な関係があると言える。これまでのフッサール、ブレンターノの議論を補完し、色と延長の関係に新たな光を投げかけるような思想が果たしてそこにみいだされるであろうか。

パースは、与件を分析するわれわれの抽象作用に対する分析という、メタな観点からの分析を行っている。そのなかで、抽象作用が、意味区別 discrimination、抽象分離 prescision、解離 dissociation の三種類に分析される。これらの違いは、以下のように、何から何を区別できるのかにもとづい

ている。

① 青から赤を区別すること
② 色から空間を区別すること
③ 空間から色を区別すること
④ 色から赤を区別すること

①はどの作用によっても可能であり、④はどの作用によっても不可能である。それゆえこれらは区別の本質にはかかわらない。問題は色と空間のあいだの区別にある。②③は、意味区別によってはいずれも可能であるが、解離によってはいずれも不可能な区別であり、そのためには特別な作用が必要となる。それが抽象分離であって、これは、②は可能であるが、③は不可能であるような作用である。

これらは次のような表で表すことができる[xix]。

【表 4.1　パースの抽象理論】

	① 青から赤	② 色から空間	③ 空間から色	④ 色から赤
意味区別	○	○	○	×
抽象分離	○	○	×	×
解離	○	×	×	×

この表から容易に推察されるように、①の区別は類としての色の下位区分であり、種のあいだの区別にあたる。また、④の区別は類と種のあいだの関係にあたる。

①の区別を部分のあいだの関係とみた場合、それはフッサールのいう断片、ブレンターノのいう物的部分あるいは可分的部分の間の関係にあたることは明らかであろう。パースの挙げる例は異なる色のあいだの区別であっ

て、延長とは直接関係しないが、しかし、異なる色によって異なる延長を塗り分けることができるという自明な事実を想起すれば、これを延長同士のあいだでなりたつような関係とみなすことができる（先のブレンターノの例においても、二つの青い点は延長によって区別されていた）。

また、先にフッサール、ブレンターノの理論に関して述べたことから明らかなように、④は、ブレンターノが早くから注意し、おそらくフッサールもそれを受け容れていたであろう、論理的部分に相当する。

もっとも、「色から赤を分離する」というその表現にはややぎこちなさがある。色には青、黄など、赤以外のものが当然あるから、そこから赤を取り出すことは何らの問題もないようにもみえる。しかし、分離不可能であるというのであるから、おそらくそのようなことが意図されているのではないであろう。とすれば、ブレンターノの論理的部分のように、赤という種には色という類が含まれている、ということが念頭にあるのであろう。だが、そうであるとすれば、「赤から色を分離する」とするほうが表現としてはいっそう自然なのではないか。しかし、このように赤と色の順序を入れ替えなくても、あるいは次のように考えるならば、これはやはり両者の不可分性について述べていると解することができるのかもしれない。つまり、色という類は赤、青、黄などの種から構成されており、したがって赤はその構成要素のひとつとして色にとって必要不可欠である、とするのである。このように考えると、ここでの赤と色の関係は、ブレンターノの論理的部分におけるものとはやや異なるものとなるが、本質的には、いずれにせよ類と種の関係が問題となるのであり、そのかぎりでは両者の思想に一致点を見出してもよいであろう。

こうしてみると、パースの抽象作用の分析は、色と延長の関係についての記述心理学的・現象学的研究と内容的に関連しており、示唆に富んだものであることがわかる。

とりわけ、ここで重要だと思われるのは、パースの分類がフッサールの分類よりも詳細である、という点である。現象学派の重要な発見は色と延長の

相即的関係であったが、ここにさらに分析を加え、両者のあいだの非対称性を明らかにしている。抽象分離という作用の発見により、色から空間を分離することはできるが、空間から色を分離することはできない、という主張が可能となったのである。色のない空間はありうるが、空間のない色、延長しない色はありえない。色を抽出しようとすると、何らかの延長がついてくるのである。

このようなパースの発見を考慮に入れるとすれば、先に示したフッサールの部分の分類はより一般的なものに拡張されねばならない。赤と延長の関係は、色と空間の関係に一般化したうえで、非対称性を考慮して再区分される必要がある。そうすると、それは次のようなものとなるのではないか。つまり、先の表 1.1 のなかの二番目の列が二つに分割され、二つの行のあいだに新しい行が挿入されるのである。

【表 4.2　フッサールによる部分の分類の一般化】

	延長と延長	赤と延長		色と赤
		色のない空間	空間のない色	
離接的	○	○	○	×
???	○	○	×	×
独立的	○	×	×	×

フッサールのオリジナルの議論においては、部分のありかたとして離接的および独立的の二つの性質が提示されたが、いまや色のない空間をも部分としてもちうることになり、かつそれを空間のない色という不可能なケースから区別することが必要となったので、この区別のためにさらなる観点を導入する必要性が生じている。もちろん、いまのところわれわれはそれを名指すのに適切な名称をもってはいないので、表中では「???」となっている。

いかなる名称が適切なのか、これは簡単に決まる問題ではないであろう。しかし、ここで摘出される部分が知覚的事実からいくらか離れたものであ

り、一種の理念化の所産であることに注意すると、フッサールの次のような指摘が意義深いものに思われてくる。

フッサールは、第三研究第9節で、現象学的本質が不精密なものであり、理念的なものではない、と主張している。この主張自体は現象学的事実についての理論的見解であろうが、主張が発せられた文脈には注意が払われるべきであるように思われる。第三研究において探究されているのは実質的な内容をもつ本質であり、たしかに理念は考察の主たる対象とはなっていない。しかし、同研究における現象学的立場を堅持するならば、ここで理念もまた現象学的な本質の一種として、いわばその極限として、部分と基づけの概念によってとらえることができるものだ、とみるべきではないであろうか。

そうであるとすると、ここで新たに析出された部分は一種の理念であるが、これを現象学的な観点から言いかえると、具体的な内容に対する精密な形式としての部分ということになるであろう。それゆえ、上掲の表における「???」の箇所は、「精密な」としてよいかもしれない。延長同士の関係はもちろん精密に区分可能であり、赤と色と関係は精密に不可分であるから、色と延長以外の関係についても、この形容は整合的であり、妥当である。

パースは、抽象分離 precsision について、それが precise などに通じるものであると注意している[xx]。そこには精密にも通じる語義が含まれるのではないか。

パースは抽象分離によって色と空間を分離したのであるが、このアイディアの背後に、感性において質料と形式を峻別し、形式としての空間・時間の実在性を否定する超越論的観念論に立つという、カントの超越論的感性論の主張を透視することは困難ではあるまい。周知のように、カントは空間の形而上学的究明において、空間は、その内容なしにありうる形式である、と主張している。

これまでの議論の帰結からみると、質と空間のあいだの依存関係に関しては、パース、カントらの思想と、後期のブレンターノの立場は一致することになる。だが、彼らの思想が完全に同一視できるかというと、そうはゆかな

いように思われる。とくに、カントとブレンターノのあいだには大きな差異がある。カントは、空間（および時間）を対象の部分とすることに反対する（超越論的感性論第３節、空間概念の超越論的解明、その結論（ａ）で、空間は物自体の規定ではない、としている）。この立場からは、形式ではあっても対象の部分として取り出された、より具体的な空間というわれわれの分析結果を受け容れられないであろう。精密な部分としての空間は、カントの理念に接近しつつも、それと完全には同一視されえないような、新たな部分概念なのではないか。

5. おわりに

本稿では、色と延長の関係についてのフッサールのメレオロジーの起源を訪ねて、ブレンターノのメレオロジーを検討した。そこでは現象学とは異なる概念装置によってこの独特の事態が分析されていたのであるが、その様子を実見することで多様な概念の連関を知ることとなり、遂にはパースの抽象理論との内的関連まで明らかとなった。彼らの思想はそれぞれに個性的であり、一致した結論を見ているわけではもちろんないが、共通のテーマを設定することで、それぞれの本質を際立たせることができる。色と延長はまさにそうしたテーマのひとつだったと言える。

パースとブレンターノのあいだには実際の思想的影響関係はおそらくない。彼らの思想はそれぞれ独立に形成されたものであろう。しかしながら、パースの思考のなかにブレンターノ及びブレンターノ学派、現象学派の思想を想起させる要素があることは、一部の論者が認めている[xxi]。両者の思想の比較研究は多くはないが、今後一層の検討に値するのではないかと思われる。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP23K00095（「メレオロジーの成立と展開に関する思想史的研究：フッサールとホワイトヘッド」）の助成を受けたものである。

〔注〕

[i] Husserl (1992)
[ii] Richard (2014)
[iii] Kriegel (2018: pp.32–40)
[iv] Chrudzimski & Smith (2004), Kriegel (2018)
[v] Brentano (1982: Ch.2)
[vi] Brentano (1985)
[vii] Baumgartner & Simons (1993)
[viii] Smith (1988)
[ix] Chrudzimski & Smith (2004)
[x] Mulligan & Smith (1985)
[xi] Smith (1993)
[xii] Baumgartner & Simons (1993)
[xiii] Chrudzimski & Smith (2004), Chisholm (1978)
[xiv] Massin (2017)
[xv] Simons (1987: Ch.8, §6)
[xvi] Correia (2005), Richard (2010)
[xvii] Peirce (1992: Ch.1)
[xviii] 遠藤 *et al*. (1987: 191–206)
[xix] Murphey (1993) にはパースの草稿が収められており、そのなかにはパース自作の同様の表が示されている。Atkins (2018) にも同様の表があるが、やや不正確である。
[xx] Peirce (1998: Ch.25)
[xxi] Rosensohn (1974: Ch.2)

文　献

［非邦語］

Atkins, R. K., 2018, *Charles S. Peirce's Phenomenology: Analysis and Consciousness*, Oxford: Oxford U. P.

Baumgartner, W., & P. Simons, 1993, 'Brentanos Mereologie', *Brentano Studien* 4, 53-77

Brentano, F., 1982, *Deskriptive Psychologie*, Hamburg: Meiner

——, 1985, *Kategorienlehre*, Hamburg: Meiner

Chisholm, R., 1978, 'Brentano's Conception of Substance and Accident', *Grazer Philosophische Studien* 5, 197-210

Correia, F., 2005, *Ontological Dependence and Cognate Notions*, Munich: Philosophia

Chrudzimski, A., & B. Smith, 2004, 'Brentano's Ontology: From Conceptualism to Reism', in Jacquette (2004), 197-219

Husserl, E., 1992, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band, I. Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis, Gesammelte Schriften* 3, Hamburg: Felix Meiner

Jacquette, D., 2004, *The Cambridge Companion to Brentano*, Cambridge: Cambridge U. P.

Kriegel, U. (ed.), 2017, *The Routledge Handbook of Franz Brentano and the Brentano School*, London: Routledge

——, 2018, *Brentano's Philosophical System: Mind, Being, Value*, Oxford: Oxford U. P.

Massin, O., 2017, 'Brentano on Sensations and Sensory Qualities', in Kriegel (2017), 87-96

Mulligan, K., & B. Smith, 1985, 'Franz Brentano on the Ontology of Mind', *Philosophy and Phenomenological Research* 45/4, 627-644

Murphey, M. G., 1993, *The Development of Peirce's Philosophy*, Indianapolis: Hackett

Peirce, C. S., 1992, *The Essential Peirce, Volume 1: Selected Philosophical Writings (1867–1893)*, Bloomington: Indiana U. P.

——, 1998, *The Essential Peirce, Volume 2: Selected Philosophical Writings (1893–1913)*, Bloomington: Indiana U. P.

Richard S., 2010, 'Détpendance et ontologie formelle: la question de l'intégrarité des objets', in S. Richard (ed.),, *Analyse et ontologie: Le renouveau de la métaphysique dans la tradition analytique*, Paris: Vrin, 71-109

——, 2014, *De la Forme à L'Être: Sur la genèse philosophique du projet husserlien d'ontologie formelle*, Montreuil-sous-Bois: Ithaque

Rosensohn, W. L., 1974, *The Phenomenology of Charles S. Peirce: From the Doctrine of Categories to Phaneroscopy*, Amsterdam: B. R. Grüner

Simons, P., 1987, *Parts: A Study in Ontology*, Oxford: Clarendon

Smith, B., 1988, 'The Soul and Its Parts: A Study in Aristotle and Brentano', *Brentano Studien* 1, 75-88

——, 1993, 'The Soul and Its Parts II: Varieties of Inexistence', *Brentano Studien* 4, 35-51

［邦語］
遠藤弘・白石光男・中田勉，1987，『現代論理学と論理思想の基礎』八千代出版

Color and Extension

SAITO Nobuto

ABSTRACT

An object has a color and a size at the same time. This is such a self-evident fact that it feels rather strange to describe it again. But it is perhaps not as strange as the fact that this banal fact once fascinated many great philosophers and made them speculate. As a result, this question contributed in no small way to the progress of metaphysics and is still today one of the best starting points for discussing the relationship between consciousness and being. What can we know from this fact that completely different data of color and extension are given in close unity? In this paper, I would like to compare the considerations of this case by three great philosophers, Husserl, Brentano, and Peirce, and consider the question of what the order of the sensible world is.

The discussion proceeds as follows. First, I will lay out the main points of mereology and foundation theory in Husserl's *Logical Investigations*. Next, in order to clarify the background of Husserl's argument, I will examine Brentano's psychological philosophy, which is considered to be the origin of Husserl's argument, with a focus on its unique mereology. Then, the basic concepts of Husserlian and Brentanian mereologies will be examined with a modern perspective. Thus, as the nature of the problem surrounding the relationship between color and extension becomes clearer, the inner connection between Brentanian or phenomenological philosophy and Peirce's thought becomes clear. Finally, I conclude my discussion by stating what we have learned from comparing these various theories and what our direction could be.